

論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	乙 第	号	氏 名	田口 英明
論文審査担当者	主 査	：牧野 邦昭（慶應義塾大学経済学部教授 博士（経済学））		
	副 査	：小室 正紀（慶應義塾大学名誉教授 博士（経済学））		
		：中西 聡（慶應義塾大学経済学部教授 博士（経済学））		
	面接担当	：橋口 勝利（慶應義塾大学経済学部教授 博士（経済学））		
		：壽里 竜（慶應義塾大学経済学部教授 博士（経済学））		
(論文審査の要旨)				
論文題名：元禄・享保期上層民の経済思想に見る「作為」と市場経済 一河内屋可正、伊能景利、田中休愚の事例によせて一				
本論文は元禄（1688-1705 年）から享保（1716-36 年）に、都市近郊農村の上層農民として活動し著作を残した河内屋可正（1636-1713 年）、伊能景利（1668-1726 年）、田中休愚（1662-1729 年）の三人を取り上げ、彼らの経済に向き合う精神と思想を考察したものである。 本論文が、このような対象を取り上げている視角は、彼らの中にその後の時代に長く影響する「経済主体」の原型を見ようというところにある。それは、川口浩『江戸時代の経済思想―「経済主体」の形成』（1992 年、勁草書房）における「経済主体」という概念の影響を受けつつも、川口とは別個のところにこそ「経済主体」の形成を発見しようというものである。 川口は 17 世紀から 18 世紀初頭にかけての山鹿素行、熊沢蕃山、伊藤仁斎、荻生徂徠、石田梅岩らの中に、経済を重視し、それを合理的に把握しつつ、自らの存在を賭けて経済に積極的に取り組む思想の確立を読み取り、そこに経済の担い手たる「経済主体」の形成を見た。また、それを明治期以降の資本主義の展開を可能にした要素の一つと論じた。 これに対して本論文は、日常的に経済活動に従事していた実務家の中にこそ、「経済主体」の形成を見出すべきだと考えている。川口が取り上げた山鹿素行以下の対象は、石田梅岩を別とすれば、専門の儒学者であり、時代の儒学思想を革新した「頂点的思想家」であった。しかし本論文では、現実の経済活動からは距離がある彼らは、経済の実態の理解には限界があると考えている。また彼らは、自らが依拠する儒学の枠組みとの理念的な整合性を重視する面から逃れ難く、その思想と経済実態との間には一程度の乖離があると見なす。これらの見方から、本論文では、日常的に経済活動に従事していた実務家が書き残したもののの中に、「頂点的思想家」とは異質の経済思想を析出し、そこにこそ後に繋がる「経済主体」の形成を見るべきだという視点に立っている。 さらに本論文では、福沢諭吉の見解を参考として、江戸時代の思想の基本として儒学を				

重視することにも疑問を呈している。福沢は、江戸時代において武士の精神（「徳教」）を形作ったものは封建的主従関係の実態であり、その精神を言語化するに際して儒学用語が選択的に利用されたに過ぎず、儒学が武士の「徳教」を形作ったわけではないと考えた。また農工商の三民に関しては、彼らの「徳教」を導いたものは儒学ではなく仏教であったと断じている。本論文が儒者である「頂点的思想家」ではなく、経済の実務家であった上層農民の中に「経済主体」を見出そうとしているのは、この福沢の見解にも依っている。

なお、そのような考察対象の選択の上で、本論文は、前近代思想から近代思想への転換に関する「「自然」から「作為」へ」というパラダイムを分析の枠組みとして援用している。このパラダイムは丸山眞男が、フランツ・ボルケナウの『封建的世界像から市民的世界像へ』（1934年）の影響をうけつつ、『日本政治思想史研究』（初版1952年、新装版1983年、東京大学出版会）において江戸時代の政治思想史の展開に当てはめたものである。前近代思想においては、スコラ哲学であれ朱子学における天理であれ仏教の輪廻であれ、古今不変の「自然」的秩序の存在を信じ、それに包摂されているものとして人間を考える。それに対して、近代思想においては、世界を歴史的に変化するものと考え、その変化を把握し、そこに「作為」的に働きかけてゆく主体として人間を考えるようになる。これが「「自然」から「作為」へ」というパラダイムであり、本論文は、元禄から享保にかけての民間実務家の書き残したもののうち、その変化の原型を析出しようとしている。

以上のような視角と分析枠組みを論じた序章を含めて、本論文は以下のような構成で論を進めている。

序章 元禄・享保期上層農民の経済思想の視角と対象

第一章 河内屋可正の経済思想—元禄期畿内在郷町における「工夫」と「進退」

第二章 伊能景利の紀行文とその社会経済観

第三章 伊能景利の文書編纂活動から見る地域史観と経済観

第四章 享保期民間経済思想の展開—「変」・宿命論的貧福観と「心」の相克

第五章 田中休愚における公共性と「術」—『民間省要』における「作為」の展開

終章 元禄・享保期上層民の経済思想の特質と「自然」から「作為」へ

以下、各章の概略を紹介する。

第一章は、大坂から約一日行程の在郷町大ケ塚村の地主で酒造業も営んでいた河内屋可正が、過去百年間における地域の家々の盛衰について元禄期に記した『河内屋可正旧記』を分析対象としている。この大ケ塚村は木綿や煙草の栽培などの商業的農業も展開していた先進地である。本章は、そのような先進地農村の変化する経済の中で可正が、貧福を「前因」（前世の因果）「天命」とみなす宿命論を否定し、「人為」や「工夫」という言葉で表される精神と行動で状況に積極的に働きかけていくことを重視していたことを析出している。具体的には、大ケ塚村をめぐる経済状況を客観的に観察し、この村に相応な形で

商業的農業を取り入れ、経営内で農商のバランスを取り、村内の「貧福和合」を乱さない適度な貸借関係を維持することなどを、可正は、いずれも「人為」の営みと考え、それらへの適切な対応を常に「工夫」することを不可欠とした。本章では、この「工夫」を重視する可正の経済思想に、「作為」の意識の「芽生え」を読み取っている。

第二章は、江戸より約二日行程の下利根川筋有数の町場である佐原村の名主・地主で酒造業も営んでいた伊能景利が書き残した『千代の古道』の「記行部」を素材として、多忙で緊張の多い日常生活から解放された旅の中で景利が吐露する「無常」観に注目している。景利には、人間の貧福は、必ずしも正しさや能力だけではなく、「前因」で決まるという不条理を「無常」という仏教的観念で受け入れる心性が強くあった。しかし、同時に景利は、彼の「教訓書」では、「家」の永続を願い、勤勉努力をするところに人間の営みのあるべき姿を説いており、本章では、この二つのアンビバレントな精神の構造に考察を向けている。すなわち、貧福常ならぬ「無常」なる宿命があるからこそ、不可知なその宿命に囚われるのではなく、むしろ現実に対して「作為」をもって対処してゆく積極性がそこに生まれていると本章は考えている。またそこに、心の正しさが必然的に家の繁栄につながると考える朱子学系儒学の思想とは異なる、日々厳しい現実に向き合う実務家の経済思想を見出している。なお、井原西鶴の『日本永代蔵』でも、仏教的「無常」観と「家職」への積極性が、文芸的感性に訴える形で表現されているが、本章では景利が、そのような西鶴の感性に同感しつつ自らの思想を形成している点も指摘している。

第三章も同じく伊能景利を取り上げているが、本章では彼が編纂をした『部冊帳』という文書史料集が主な分析の対象である。この『部冊帳』は、佐原村とその周辺に関する過去百年の文書を調査・収集・編纂したものであるが、その文書収集の背後にある景利の思想が考察されている。その際、本章が特に光を当てているのは、「市場出入」と「川除普請」と定免制導入の三つの問題に関する文書収集の意図である。「市場出入」は、経済状況の変化にともない村内で起きた市場権・営業権をめぐる紛争・訴訟（「出入」）に関するものである。「川除普請」は、河川治水工事にかかわる幕府の政策変更にとまなう村々農民の負担増の問題である。定免制導入の問題は、享保期における年貢制度の変更に際して、生産性の低い佐原村新田の適正な石盛（課税標準額）を主張することである。本章では、そのいずれに関しても、経済状況の変化やそれに伴う幕府経済政策の変化に対応して景利が、文書史料により問題の歴史的経緯を考察し、それによって村内の利害調整を行い、また幕府に対して村の利益を主張する根拠を固めようとしていたと論じている。さらに本章では、そこに、変化する経済や経済政策の状況に対して、客観的な資料を基に「作為」的に対応してゆく「経済主体」の存在を確認している。

第四章では、川崎宿の名主であった田中休愚の『民間省要』と『走庭記』などを考察の対象に加えて、休愚と伊能景利との共通性を論じている。可正もそうであったが、景利と

休愚も新興の文芸である俳諧の感性に共鳴し、かつ三人ともに、その背後にある『徒然草』の仏教的な「無常」観に強い共感を抱いていた。しかし同時に本章は、休愚、景利は、その「無常」観を脱俗的な諦観に結びつけてはいないと見ている。彼らは、「無常」観を、社会を常に「変」わるものと認識することに繋げ、その変化に可能な限り柔軟に対応しようとするところに人間のあるべき営みを見出そうとしていたと本章は捉えている。具体的には彼らは、元禄以降の社会の奢侈化・市場化の中で、「心を付」けて、すなわち常に細心に経済状況を観察し、「家」の継承・拡大と地域社会（本論文の用語では「在地社会」）の中での「上下和合」のために最善の手を打つべきことを説いていた。本章はそこに、「無常」観を抱きながらも、同時に実践的な知性を持って状況を適切に判断し、その経済状況に対して「作為」を行う主体性の確立を見出している。

第五章では、『民間省要』における田中休愚の道中・宿駅論（宿場の運営論）と川除普請論（治水工事論）を取り上げている。宿駅運営も治水工事も近世初め以来、「役」（賦役）の制度を基本に営まれてきた。しかし宿駅運営に関しては、元禄期以降、旧来の制度が、市場化、物価の上昇、利用状況の変化などに対応できず、宿駅と周辺農村の疲弊を招いていた。また川除普請も、幕府政策の変更による工事の広域化により、不必要に件数が増加し、さらに大都市の「^{てれん}術」（不正・手抜きを厭わない土木業者・都市商業資本）による入札請負が行われ、結果として農民の困窮化の大きな原因となっていた。本章では、休愚が、これらの問題に関して、地域の実態に精通し公共の便益を担いうる「禄重キ」百姓（上層農民）を、担当責任者に採用しうる制度的改変の必要を論じていることに注目をしている。同時に休愚は、それら上層農民には、地域独自の市場機能を取り込み、「役」の体系の良い面とのバランスをとりうる能力を求めた。そのような地域社会の実情に合わせて制度を運用する能力を、休愚は「術」と呼び、極めて重視していたが、本章はその「術」の重視に、「作為」の思想が強く現れていると考察している。さらにこのような休愚の主張に、本章は、「家」のためという目的を超えて、公共のため（「国恩」のため）に「術」の能力を発揮して「作為」する「経済主体」の思想が現れていると結論づけている。

終章では、以上の一章から五章のポイントを要約した上で、元禄・享保期における「作為」の思想の形成と展開をまとめている。その大筋は、可正、景利、休愚は、人の正しさや勤勉努力と経済的成功は必ずしも一致しないという宿命論的貧福観やこの世に永遠なるものは無いという「無常」観を次第に乗り越え、経済状況に対して積極的に対応してゆく「作為」の思想をはぐくんでいたということである。可正の場合は、その「作為」を「工夫」という言葉で強調し、地域社会の実態観察に基づく経験的・実験的な知性と、それに基づく「工夫」により、「家」の維持・継承を考えてゆくべきことを論じていると捉える。景利の場合には、「作為」を「心を付」けるという言葉で象徴し、地域社会百年の資料を調査・収集・分析することにより、過去に定められた制度の歴史性を認識しつつ、あるべ

き制度の運用を考えてゆこうとした。そこに、萌芽的ではあるが「作為」が制度の問題に向けられている経済思想を認めている。休愚の場合には、宿命論的貧福観は三者の中では最も「後景に退き」、経済生活を切り開いてゆく能動的な姿勢がより強まっているとする。彼は「作為」を「術」という言葉で高く評価し、「禄重キ」上層農民が、「術」により、「家」の継承を越えて、地域社会の安定と発展に資する経済制度を作り上げてゆくべきだとの議論にまで達していたとする。以上の三者を通して本論文は、地域社会の経済思想における「作為」の思想は、拡大してくる市場経済を背景に、それを従来の地域社会の歴史的枠組みの中に、バランスを保ちつつ肯定的に位置付けてゆこうという上層農民の模索の中に生まれてきていたとする。また本論文は、そこに民間における「経済主体」の形成を見ている。

以上の論文内容を踏まえて行なった口頭試問では、次のような多くの質問が出された。

- ▶元禄・享保期の上層農民の間に「作為」の思想が存在していたことは、実証されているが、17世紀の経済の成長と変化を考えれば、その発生はもっと遡るのではないか。
- ▶幕藩体制は、ある程度の市場の存在を前提としており、元禄期の段階では封建制と市場経済の齟齬はないのではないか。また、元禄期と享保期は経済史的には分けて考えるべきであり、河内屋可正と伊能景利・田中休愚を同一概念で取り扱ってよいのか。
- ▶当時の農村経済において家業は雇用などの面で、村内・地域における公共性を帯びており、「家」から「公」へという形で、家業と公共性を分けて考えて良いのか。
- ▶なぜ、この三人なのか。この三人でなくても良いのか。18世紀における、この種の史料の残存状態はどのような状況か。
- ▶大坂や江戸など大都市近郊以外の地域では今回の議論はあてはまるのか。
- ▶状況に働きかけてゆこうとする「作為」の思想は、身分制をどう受け入れるのか。
- ▶同じく上層農民の出身であり、「論語と算盤」を唱えた渋沢栄一など近代の思想にどのようにつながるのか。
- ▶本論文の枠組みである丸山眞男による「「自然」から「作為」へ」というパラダイムに対しては批判もあるが、そうした批判についてはどのように考えているか。

これらの質問には、申請者が考察を十分に深めていなかった問題も含まれており、今後、申請者が考察すべき課題が口頭試問において明らかになったといえる。

このような課題はあるが、本論文には以下のように高く評価すべき点も多い。

第一には、史料上の困難の克服である。江戸時代における民間の実務家は、基本的には思想書を著しておらず、彼らの経済思想を発掘するには、つねに史料的な困難さがある。しかし、本論文では、未刊行一次史料も含めて、必ずしも思想書とは言えない著作を材料として、そのテキストを丁寧に読むことにより、記述の端々から彼らの経済思想を析出している。この取り組みは高く評価すべきである。

第二は、江戸時代の民間における「経済主体」の形成を「頂点的思想家」とは全く別個のものとして析出している点である。これまでの研究では、主に儒学者である「頂点的思想家」の中に経済思想の展開を見る場合が多かった。しかし本論文は、実際に経済を担う実務家（本論文では上層農民）の中にこそ「経済主体」を見出すべきだという視点で、その析出に成功している。民間に「経済主体」の形成を見出す先行研究が無かったわけではないが、それらの研究に注目すべき事例をさらに付け加えたことは重要である。

第三には、本論文が事例として研究した民間の経済思想においては、儒学の影響が極めて弱いことを発見した点である。むしろ実務との取り組みの中で思想が形成されているというのが、本論文の論じている点である。これは、江戸時代の経済思想は儒学の影響下にあったとする従来の先入観に再考をもとめる一事例となっている。

第四に、経済思想の背景として「ある時代に生きた人が共通に持つ人格的特質」を考察している点である。具体的には、仏教的な「無常」観や「前因」として貧福を受け入れる「宿命論的貧福観」が、「経済主体」の形成とどのように関係しているかという問題である。この点に関して本論文は、二つの視点を打ち出している。一つは、「無常」観や「宿命論的貧福観」を乗り越えるところに「作為」的に経済に取り組む「経済主体」の形成を見るという視点である。もう一つは、仏教的な「無常」観や「宿命論」に自己存在の最後の拠り所を担保し、その担保の上に現実の社会へ「作為」をもって積極的に対応してゆくところに「経済主体」に形成を見出そうという視点である。この二つの視点の関係については未解決の部分があるものの、これらの視点から、仏教的価値観の経済思想への影響という問題に切り込んでいる点は銘記に値する。

第五に、これらの上層農民において、俳諧や井原西鶴や『徒然草』などの文芸的な感性への同感が、彼らの自己アイデンティティーの一つの拠り所になっている点を見出している点である。文芸的感性への同感とは、後に国学思想に結実してゆくものであり、国学運動は多くの上層農民に受け入れられてゆく。その点を見通せば、本論文が文芸的感性と経済思想の関係を示している点は重要であり、その点でも、元禄・享保期という早い時点で、儒学系の「頂点的思想家」とは異なる経済思想の流れを発掘していると言える。

以上のように、本論文の研究史上の意義は大きく、また本論文は今後の発展の可能性も内包している。それらの点を評価し、論文審査担当者一同は、本論文が博士（経済学）の学位を授与されるに十分に値するとの判断をした。

以上